

《タツタツタ》

(駆ける足音)

ノラを探し夜の道を駆ける貴方。

仮にも自分の根城としている場所の周辺なのだ、彼女が行ける範囲ならば探すのは決して難しくは無いはずである。

そう信じ、探し続いている、と奇しくも彼女と出会ったあの路地裏の近くまで通りかかった所で、

ノラ

「おい、止めろ！ 放せ……放せってつ！！」

親父

「うるせえ！ 黙つてついてこいつ！」

勝手に逃げ出しやがって……立場つてのを、教えてやるからなあ！」

路地の奥から聞こえてくる、探していた少女の声と、見知らぬ男の声。聞こえた瞬間、貴方は猛る思いの勢いそのままに、声の下（もと）へと足を急がせる。

そしてその間にも、2つの声は路地の奥から貴方の耳に響いてくる。

ノラ

「放せってんだよ、このクソ野郎がつ！！

なんだよ、なんだよ……なんなんだよつ！！

テメエが、謝るつていうから付いていつてみれば……何なんだよあの場

所はっ！？」

親父

「うるせえ、黙れ黙れ黙れ！！

お前をあの場所に連れて行くってのは、もう決まつたって言つてあつた
だろ？がよお！！

お前が逃げたせいで、おらあ違約金だなんだつて、金を貰うどころか、
金を取られそうになつたんだぞ！？

全部、全部オメエが悪いんだ……オメエが、逃げたりなんかするからわ
りいんだよお！！」

《バシンツ》

(親父がノラを殴る音)

《ドサツ》

(ノラの倒れる音)

ノラ

「がっ！？ あぐ……う、つう……。

く、ひつく……ふざ、けんな……ふざけんなよ、クソ野郎……つ。

オレはあ、オレはあ……あんたが、あんたがよお！

ぐすつ……昔、みたいに、少しでもなつてくれたんだつて……信じて、
信じて……つ

親父

——／＼……しらねえな、しらねえよ、そんなもんつ！――

お前のお陰でおらあ酒が飲める、
お前はおれに恩返しが出来る……え
え?

これ以上の良い事なんぞ、何もねえだろうがつ！

どうせ置いておいたつて……おめえも、いつかいなくなるんだろが……

今回みたいに！

だつたら、少しでもおれの徳になるよう別れて、何が悪いつてんだあ

ノ
ラ

—つ一つ！

ふ、
さ、
さ、
けんなかつ！

オレが、
オレがどんな思いでテメエの所から出てつたと思つてんだ
っ！！

クソ、クソ……なんで、なんでそんなになつちまつたんだよお……つ」

親父

「へ、へへ……知つた事かよ、
おらあもう、何もかもどーでもいいんだ
あ……。

ひひ、ああそだ……また逃げられちやたまらねえかよ。

「……お？ 一つ、男に逆らうとどうなるかっての、教えて
るでやつた方がいいかもなあ！」

《しゆる……ぱさつ》

(ズボンを脱ぐ音)

ノラ

「へ……？」

何言つて……おい、おい……嘘だろ？ 何脱いで……！？
て、てめえ正氣かよ！？ オレが、テメエの何か分かつてやつてんのか
よ、おい！？

酒でそこまでイカれちまつたのか！？」

親父

「へへへ……全部、全部逃げるやつが悪いんだよお……へへへ。
ほおら、これが男のモノだぞお？ お前がこれから毎晩口にもアソコに
も咥えるもんだあ、へへ！
ほれえ、まずは口からだあ。オレがくれてやれる最後の教育つてもんだ
あ、しつかり味わえよお……ひひつ！」

ノラ

「おま、ふざけ……ひつ！？
やだ、やだ……つ！？ そんなもの近づけるなつ！！
ひぐつ、う……臭いが、鼻に……うぐつ！？
やだ、やめる、やめてくれつて……くさ……ひうつ！？」

親父

「ほれえ、よく嗅げえ？」

ひひひ、たつぶり馴染ませて店で粗相（そそう）しないように教育して
やるからよお！

おら、匂いを嗅ぐだけじゃなくて、次は口だつて言つてんだろ……ほ
れ、開けろ、開けろってえ！」

ノラ

「むう、むう……う、や、らあ……やだあ……ぐす、ひっく……う、あ

……

たすけて、だれかあ……やだよお、ぐす。

こんなの……やだああああああああつつ！！」

《どごんつ！！！！》

（貴方の拳が、男を弾き飛ばす音）

貴方が路地の奥についた時には、ノラの鼻先に薄汚い男のイチモツが突
きつけている最中であつた。

その瞬間、貴方の頭は真っ白になる。

町の中だと、人を安易に殺めてはいけないなどという理屈は何処かに
吹き飛び、冒険者として鍛えた膂力でもつて全力で、男を壁まで殴り飛
ばした。

親父

「ひげえつ！？ がつ、ぐえ……いとえ、な……なんだあ？」

《どんつ！ばきつ！どすつ！どすつ！！》

親父

「ひぐつ！？ ぐえつ、がつ！？」

ぎい、いぐつ……ぶつ、うつ……お、おぶうつ！？」

下半身を露出させたままの男が、何が起きたのか分からず身を起こそうとするが、それを貴方は許さない。

言葉を吐き出す間（ま）も与えぬとばかりに、壁に弾きとんだ男へ怒りのままに何度も、何度も、拳を振り上げ、振り下ろす。

親父

「ぎぶつ！？ ぐつ、ぶえつ……いぎ、が……ひぎやうつ！？」

ぐ、が……ぶお……ぐつ、げほおつ！？」

男は何の抵抗も出来ずに、貴方の拳をめり込ませて体をくの字に曲げて悶絶する。

顔は痣で腫れあがり、吐き出す唾液には赤い血の色が混じり始めるが、それでも……貴方は拳を止めるつもりにはなれなかつた。

ノラを、彼女を最悪の形で傷つけようとした。

その怒りが、拳を止めるという選択肢を貴方から奪い去つていたのだ。

親父

「がつ……ひゅ、……かひ……あ」

もはや体を動かす事すらまらない様子の男を冷たく見下し（みおろ

し）ながら、貴方はトドメの一撃を加えるべく大きく腕を振り上げ
……。

ノラ

「ダメエ！……！」

《ぎゅうっ！！》

（ノラが抱きしめる音）

振り下ろす瞬間、ノラが悲痛の叫びと共に貴方に向かって抱きついた。顔を涙でぐしゃぐしゃに汚し、怯えに瞳を濡らしながら、それでも彼女は貴方が拳を振り下ろすのを許してくれない。

ノラ

「ごめつ……ひつく、ごめ……ありがとう、ありがとう……ぐすつ
でも、でもダメ……止めて、ぐすつ……それをやつたらこいつ死んじや
う。

死んじやうよお……やだよお、やだあ……」

確かに、ノラの目の前で人が死ぬのは良いことではない。

だが、こんな男を放つておけば、いつまた彼女に被害が出るかも分から
ないのだ。

【頼むから、止めないでくれないか？】

怒りに震える声で、それでも出来る限り泣きじゃくる少女に優しく声を
かける貴方。

けれど、それでも少女は涙ながらに首を横に振る。

ノラ

「ダメなんだ、ダメなんだよお……！」

おっさんの、気持ちは……すげえ、すげえ嬉しい……ぐすつ。
でも、でも……こいつ、こいつ……」

涙で崩れているノラの顔が、余計に歪む。

言いたくない事を、どうしても言わねばならないというように。

そして、意を決したのか、ポロポロと流れ続ける涙を拭いもせずに、真
っ直ぐ貴方の瞳を見て、懇願する。

ノラ

「親父なんだあ……！」

オレのお、親父なんだよ……こいつつ！

こんな、クソ野郎だけど……オレのお、親父なんだよお……つ！
だからお願ひ……ぐすつ。ころさ……ないでえ……つ！

うつ、あ……う…、うう……うわああああああつつ